

西南学院大学大学院
「国際文化研究論集」第6号抜刷
平成24年1月発行

博多祇園山笠の起源時期における
多元的な文化交流に関する考察
—中世博多の聖一国師，櫛田神社，謝国明に着目して

周 宏 仁

博多祇園山笠の起源時期における 多元的な文化交流に関する考察

—中世博多の聖一国師，櫛田神社，謝国明に着目して

周 宏 仁

目 次

- 0. はじめに
- 1. 中世博多の社会背景
 - 1.1 平安時代の前半期 東アジアの貿易交流
 - 1.2 平安時代の後半期 日宋貿易の拠点
 - 1.3 鎌倉時代の前半期 綱首人物の活躍
- 2. 人物：聖一国師と博多綱首謝国明
 - 2.1 聖一国師
 - 2.2 綱首とは
 - 2.3 謝国明
- 3. 中世博多の宗教の現状
 - 3.1 櫛田神社—神仏混淆の祇園信仰
 - 3.2 仏教と結びつく博多綱首
 - 3.3 宗教都市の道へ
- 4. 多元的な文化交流
 - 4.1 日中国際文化の交流
 - 4.2 聖一国師と謝国明の信頼関係
 - 4.3 神道と仏教の宗教融合
- 5. おわりに
- 参考文献
- 付録 聖一国師年表

0. はじめに

770年の伝統を誇る博多祇園山笠は、博多の総鎮守櫛田神社の奉納神事であり、日本全国的に知られる祭り、国指定無形民俗文化財である。博多祇園山笠に関する歴史的な起源は博多祇園山笠振興会の公式ホームページによると諸説¹がある。櫛田神社の社伝によると、祭神の一つ祇園大神（素戔鳴命）を勧請したのが天慶四（941）年。すでに都（京都）では現在の祇園祭につながる御霊会が行われており、勧請間もなく始まったという説。また、文献的初見である「九州軍記」に基づいて永享四（1432）年起源説もある。

諸説がある中で、博多祇園山笠振興会は一般に広く知られている聖一国師が仁治二（1241）年、疫病除去のため施餓鬼棚に乗って祈祷水（甘露水）をまいたのが始まりという説を取っている。当時は神仏混淆の時代。これが災厄除去の祇園園信仰と結びついて山笠神事として発展したというのだ。この1241年を起源として、2011年の本年は丁度770回目の記念すべき開催となる。―後文略―²と述べられている。

¹ 博多祇園山笠史談 落石栄吉 博多祇園山笠振興会 1961 P37を参照。

「博多祇園山笠の起源については年代が古いので、まだはつきとした定説がない。通説を四つひろひろつてみる事にした。

（1）往古の大嘗会の会式の山を引廻ったのを模倣した（石城遺聞）。

（2）平安時代の天慶四年（西暦九四一年）藤原純友（すみとも）、乱を起すや追討使小野好古（よしふる）は、山城国祇園社（京都一八坂神社）に神助を祈願し、戦勝奉賽のため、素戔鳴神を当地から勧請しから始められたという。

（3）聖一国師（円爾弁円）が仁治二年、疫病除去のため施餓鬼棚に乗って祈祷水（甘露水）をまいたのが始まりという。

（4）九州軍記に、室町時代の永享四年（一四三二年）旧六月の十五日、博多津櫛田の祇園の社祭あり、三社の神輿、澳の浜（現大浜）へ御幸の後、山の如く（原田記には山笠とて……とあり）十二双（本）の作り物を組み、上に人形のようなものをすえて、これを昇棒もち歩行く。前代かつてなかりしことなれば見物の貴賤幾千万という数を知らず……」とあり。」

² 博多祇園山笠振興会の公式ホームページ

<http://www.hakatayamakasa.com/history.php>

「博多祇園山笠の起源には諸説がある。櫛田神社の社伝によると、祭神の一つ祇園大神（素戔鳴命）を勧請したのが天慶四（941）年。すでに都（京都）では現在の祇園祭

以上が博多祇園山笠の沿革や概略である。もしこの祭りはいくつかの重要な接点がなかったら、皆に知られている現在の都市の祭礼にならないであろうと想定している。

本論は博多祇園山笠祭の起源に基づく、集まった歴史的な文献資料を検証し、把握して、史的視点で当時の状況を分析してみるというものである。中世博多における多元的な面貌がこの都市祭礼の形成時にどのような役割を果たしたのだろうか。これらの問題点は我々にとって研究の価値があると思う。山笠起源の文中には書いてあった人物聖一国師と書いてなかった博多の多元的な現状(社会、人物、宗教)。それぞれの関連性を詳しく考察しようと思う。

1. 中世博多の社会背景

1.1 平安時代の前半期 東アジアの貿易交流

八世紀末から九世紀中ごろ、東アジア国家間の貿易は新羅商人、唐商人が頻繁に来航し、日本と新羅、中国は渤海で交易の形態が顕著になったという。

その時期、律令国家である日本は、新羅や中国から交易船が博多津に入港す

につながらる御霊会が行われており、勧請間もなく始まったという説。また、文献的初見である「九州軍記」に基づいて永享四(1432)年起源説もある。

諸説がある中で、博多祇園山笠振興会は一般に広く知られている聖一国師が仁治二(1241)年、疫病除去のため施餓鬼棚に乗って祈祷水(甘露水)をまいたのが始まりという説を取っている。当時は神仏混淆の時代。これが災厄除去の祇園園信仰と結びついて山笠神事として発展したというのだ。この1241年を起源として、2011年の本年は丁度770回目の記念すべき開催となる。時代は鎌倉、室町から戦国時代。博多の町は大陸貿易の基地として栄え、それが故に戦国大名、豪族の争奪の場となって焼け野が原と化した。その復興を命じたのが豊臣秀吉で、「太閤町割り」「博多町割り」と呼ばれる。その間、博多山笠も隆盛、衰退を繰り返したに違いない。山笠は、古くは高さ15メートル前後のものをゆっくりと昇っていたが、「柳田社鑑」によると、貞享四(1687)年正月、豎町(恵比須流)に嫁いだ土居町(土居流)の花嫁が、花婿ともども里帰りしたところ、土居町の若者が余興として花婿に桶をかぶせるなどしたため、豎町の若者が怒って押しかけて一触即発に。この場合は何とか収まったが、夏のお祭りの際、恨みが残っていた恵比須流が昼飯を食べていた土居流を追い越そうと走り出し、土居流も負けてはならじと走り、これが評判を呼び、「追い山」に発展したという。明治維新後も何度かの危機を乗り越えて現在の博多祇園山笠がある。」を参照。

ると、博多商人たちを7世紀末から11世紀まで大宰府鴻臚館に収容した。

最初には中世の博多商人がどのように登場してきたかを簡単に説明する。奈良時代から平安時代にかけて、鴻臚館の時代西暦688年(持統2年)～1091年(寛治5年)があり、主として中国と交易をしていた。その時期の交易システムは、簡略に言えば国家管理の「官貿易」だという。原則として国が先に買いつけて、その残り物を商人が売買するのである。

商人たちには宿舎と食糧が支給されたが、交易が終わってから退去させられることになった。さらに、交易という手段はその施設に限って認められ、それ以外の場所での私貿易を禁止している。なお、中央・地方官庁による関税の徴収が行われ、そして低価格での積載品の買い上げが行われた。その後で、中央貴族や九州・中国の地方豪族、博多商人との交易が認められた。しかも、十一世紀後半以降、宋代となってから、日本中央政府の力が及ばなくなって鴻臚館がなくなった。鴻臚館を舞台とした貿易は十一世紀半ばごろで終焉を迎え、狭義の博多が貿易の拠点となる³。それ以後、宋商人は博多津に居留して交易を行うようになった。それは上記の国家による全面的な管理交易からの大きな転換であった。中国商人の居留規模はかなりなものとなった。

1.2 平安時代の後半期 日宋貿易の拠点

十一世紀後半、北宋は積極的に貿易振興策をとり、特に神宗(1048-1085)の時期に活発になった。各種の専売機関をつくり、市舶司をおき貿易相手国の専門化をはかる⁴。大宰府鴻臚館が衰退してから、機能が消失したわけではないものの衰微する。日宋間の正式の外交貿易は行われず、一般人の渡航は禁止され、中国商人は主に博多や越前敦賀へ来航し、私貿易が行われていた。

その時期の政治人物平清盛は父忠盛の後を継いで伊勢の銀などを輸出品に宋との貿易を活発化させた。1158年(保元3年)に大宰大貳となった頃に清盛は博多に人工港「袖の湊」を開いて日宋貿易の中継地としたと考えられている。

³ 中世近世博多史論 川添昭二 海鳥社 2008 P30を参照。

⁴ 中世近世博多史論 川添昭二 海鳥社 2008 P90を参照。

ところで、十二世紀後半、平氏政権の最盛期であった。平氏は平忠盛が鳥羽上皇の院司として、上皇のもつ肥前国神崎荘に到着した宋商周新の船に対する貿易管理権を大宰府官人と争うなど、はやくから対外貿易の利潤に着目していた。平清盛は積極的な貿易振興策をとり、大輪田泊を修築するなど、瀬戸内海航路の整備を行う。宋商船は直接、大輪田泊まで入港し、日宋貿易はさらに活発になった。「博多湾など北部九州の貿易拠点はさらに重要なものになっていく。大量な宋銭の輸入と流通も、平氏政権の大きな経済的な基盤となった」⁵。

この時期、大勢の新住民が博多に移住してきた。「大唐街」と呼ばれる中国人街が筥崎宮周辺に形成されたのをはじめ、博多津の東、箱崎（現福岡市東区）にも大きな中国人の集住地が存在していた。異国風の建物が建ち並び、多数の外国商人が行き交う国際貿易都市であった。中国商人は船団を組んで盛んに往来し、博多に住居を構え、寺社とともに結び付いた。さらに、中国商人は「綱首」と称されている。博多津では中国商人や筥崎宮、住吉神社など寺院神社や荘園領主らの私貿易による日宋貿易の重要な拠点となった。

1.3 鎌倉時代の前半期 綱首人物の活躍

平安時代後半は平氏政権の最盛期であった。保元三年（1158年）に大宰大貳となった頃に平清盛は積極的な貿易振興策をとり、大輪田泊を修築するなど、瀬戸内海航路の整備を行う。「袖の湊」⁶（そでのみなど）と称されている人工港を開いて日宋貿易の拠点としたと考えられている。宋商船は直接、大輪田泊まで入港できて、日宋貿易はさらに活発になった。平安時代後半期から鎌倉時

⁵ 福岡県の歴史 川添昭二・武末純一 山川出版社 1997 P93を参照。

⁶ 博多の「袖の湊」：住吉神社に保存されている博多古図、鎌倉時代の様子と思われる地図に、その後の町をあてはめて作られているものらしい。（博多浪漫－博多町人連盟、絵と話は福岡市教育委員会、大庭康時氏）。

JR博多駅と天神の間は冷泉津と呼ばれる大きな入り江で、那珂川や御笠川が流れ込んでいた。蓑島は文字通りの入り江に浮ぶ小島、現在は美野島商店街のあるところ。住吉神社のあるあたりは岬ようになっていた。櫛田神社の少し北に“袖の湊（そでのみなど）”と書かれた入り江があって、冷泉津と博多湾をつないでいたらしい。聖福寺、承天寺はこの袖の湊から南側、博多駅寄りの場所にある。

代にかけて博多は国際的な貿易都市として有名であった。その時期に、博多には活発な商業活動を行ったので外国商人がたくさん博多に滞在している。綱首と称されている中国商人は貿易の第一線で活躍していただけではなく、1195年（建久6年）に帰朝した栄西が博多に聖福寺を開山したのも、綱首が心物両面で援助したからであった。それゆえ、綱首の存在と力が日中交流関係の重要な接点となったのは明らかである。

2. 人物：聖一国師と博多綱首謝国明

2.1 聖一国師

円爾（えんに）⁷—聖一国師 1202-1280年（建仁2年～弘安3年10・17）鎌倉中期の臨済宗の僧。諱は弁円（べんえん）、諡は聖一国師。駿河国（現静岡県）の人。五歳で久能山の堯弁について「俱舎頌」を学び、一八歳のとき園城寺（三井寺）に赴いて天台密教を修め、次いで東大寺に登壇受戒した。一方、上野長楽寺の栄朝、鎌倉寿福寺の行勇に参じ、黄龍派の臨済禅をも学んだ。1235年（嘉禎元年）入宋し、天童山の癡絶道冲ら各山の禅匠を歴参したのち、径山（きんざん）の無準帥範に随従し、彼の法を継いだ。1241年（仁治2年）帰国し、大宰府横岳の崇福寺、博多の承天寺などを開き、北九州に禅宗を宣揚した。1243年（寛元元年）関白九条道家の招請を受けて上京し、東山の東福寺の開山となった。東福寺が禅・天台・真言三宗の兼修道場であったごとく、弁円の禅風も天台密教と無準から継承した揚岐派の臨済禅との教禅兼修的ではあったが、栄西の禅風を一歩すすめて、禅を基調とする立場を鮮明にしている点に特色がある。彼の門下には旧仏教を学んだ者が多く集まり、そのなかから東山湛照、蔵山順空、白雲慧暁、無関普門、無住道暁など、多数の禅傑を輩出して聖一派を形成し、日本の臨済禅の発展に大きく貢献した。弁円は没後、1311年（応長元年）花園天皇から聖一国師の勅諡号を受けたが、これは日本における国師号の

⁷ 日本史大事典 下中弘 平凡社 1996 P1-952を参照。

嚆矢である。彼が請来した多くの典籍は東福寺山内の普門院に所蔵され、五山文化発展に寄与した。著作に「聖一国師語録」がある。聖一国師年表は文末の付録を参照する。

2.2 綱首とは

「綱首」という名詞が日本の辞典には詳しく載っていないので、以下、引用文で説明する。「鎌倉、南北朝、室町、戦国時代の、十二世紀末から十六世紀後半までの博多には、貿易商などの多くの宋人が居住し大唐街と言う街を形成していました。なかでも、宋（中国）臨安（杭州）からやってきて日本に帰化し博多に住んだ貿易商人で謝国明は博多綱首（ごうしゅ・博多を拠点とする中国貿易商人）として13世紀前半に活躍した人物で、博多に居住した中国の宋人の資本家でした。綱首は、本来は貨物を輸送する組織を意味し、貿易船のオーナーです。宋人の綱首たちは、資本を調達し提供して船を作り、積み荷を集める。そして船長として航海と交易の采配を振り、日宋貿易を大きく取りしきっていました。」⁸この文章によると、「綱首」という称号が博多地域で使える言葉だと説明されている。

2.3 謝国明

謝国明⁹（しゃこくめい）鎌倉時代の博多居住の宋商人。1193年¹⁰（建久2年）。南宋時期に臨安府（現在中国浙江省杭州）の出身という。博多に居住して宋と貿易を行った博多綱首のひとり。住居は櫛田神社の側にあった。1242年（仁治3年）博多に禅寺承天寺を建立し、円爾を開山とした。南宋の径山万寿

⁸ 日本に来ていた南宋時代の華僑、中世博多の綱首（ごうしゅ） <http://www.kodai-bunmei.net/bbs/bbs.php?i=200&c=400&m=251642> を参照。

⁹ 日本史大事典 下中弘 平凡社 1996 P3-1056 を参照。

¹⁰ 謝国明の墓の紹介文による「建久2（1193）年、宋で生まれた謝国明は、帰化して綱首謝太郎国明といい、櫛田神社の近くに住んで日宋貿易に従事。博多に居を構え、承天寺建立に際して工事を担当し、資材等も寄贈した。また、はり治療を教えたり、貧民救済を行い88歳でなくなった。」

所在地：福岡市博多区博多駅前1丁目25

寺が火災にあったとき、1243年（寛元元年）円爾の勧めにより板一〇〇〇枚を送っており、径山無準師範から返礼として虎の図を贈られた。宗像社領筑前国小呂島（現福岡市西区）を領有し、地頭と号して社役を務めなかった。その遺領は日本人と考えられる後家尼が相伝した。また、筥崎宮とも関係があり、筑前国那珂郡内の筥崎宮領を購入して、承天寺に寄進している。謝国明は禅への信仰心もあつかったようである。1195年（建久6年）に帰朝した栄西が博多に聖福寺を開山したのも、謝国明ほかの宋人の援助があったからと言われていゝる。1241年（仁治2年）の承天寺開山も謝国明が援助したことによるものである。謝国明の財力は櫛田神社にも協力を惜しまなかった。1248年（宝治2年）に承天寺が火災にあった時、彼は「一日にして仏殿など十八堂を再建させた」と伝えられている。禅への信仰心と巨万の富をもつ自信がはっきりと見える。

3. 中世博多の宗教の現状

3.1 櫛田神社—神仏混淆の祇園信仰

博多祇園山笠の沿革には「当時は神仏混淆の時代。これが災厄除去の祇園信仰と結びついて山笠神事として発展したというのだ。」と述べているが、神と仏両宗教はどのような関係があるのだろうか。まず、櫛田神社に関する神と信仰を説明する。

櫛田神社は福岡市博多区にある神社である。古くより博多の氏神・総鎮守として信仰を集める。7月の博多祇園山笠や10月の博多おくんちなどの祭事をおこなう。5月の博多松囃子（博多どんたく）は厳密には櫛田神社の祭事ではないものの、松囃子一行は櫛田神社から出発するしきりになっている。旧社格は県社である。地元の人々からは「お櫛田さん」と愛称で呼ばれている。祭神は大幡主命（櫛田宮）・天照皇大神（大神宮）・素戔鳴尊（祇園宮）。中殿に大幡主大神、左殿に天照皇大神、右殿に素戔鳴大神を祀る。

大幡主大神は757年（天平宝字元年）に鎮座し、素戔鳴大神は941年（天慶

4年)、藤原純友の反乱の鎮圧に当たった小野好古が神助を祈願し山城(京都)祇園社から勧請した。天照皇大神についてはあまりに古くて記録がない。

中世、兵火に遭って度々、荒廃したが、1587年(天正15年)、秀吉公が博多町割(復興)の実施とともに現社殿を建立、寄進した。古来、商売繁盛、不老長寿の“お櫛田さま”として篤い信仰を集めている。

祇園の神である素戔鳴尊とは、インドの釈迦の生誕地に因む天竺の祇園精舎の守護神であるゴツテンノウ(牛頭天王)ともされていた。神仏混淆あるいは神仏習合という時代を背景に、この行事が疫病をはやらせる、あるいは鎮めるとされる祇園信仰¹¹(素戔鳴尊と牛頭天王の合体)と結びついて櫛田神社の祭神のひとつ素戔鳴命の祭礼に発展したものと見られる。

3.2 仏教と結びつく博多綱首

文献からみれば、古代から中世にかけて博多は国際都市として繁栄した。博多は中国の史書に見える奴国の時代から数えても二千年に近い歴史を持つ。しかも、中世日本の対外関係の拠点として、アジアへ向けて日本の顔であった。中世日本の対外関係では、禅僧、禅寺が重要な役割を果たしている。博多の場合はその典型である。中世の博多は、臨済宗と茶で知られる栄西の活動で始まる。仁和寺の荘園・怡土荘の対外貿易港として今津が平安末期ごろに開かれたと見られているが、栄西は同地の誓願寺(現福岡市西区)にかかわり、前後十余年今津を中心に活動し、地域社会の教化を行っている。

福岡市の文化財担当者によると、博多浜の中世は、栄西を開山とする聖福寺の創建に始まるといい。聖福寺が建てられたところは宋人百堂の地といわれていたという。平安末期に、博多を拠点にして中国や朝鮮と貿易を行っていた宋の貿易商人(博多綱首)たちが、数多くの信仰施設を造り、廃絶し、無人のような状況になっていたのであろう。聖福寺は鳥羽天皇や源頼朝の保護があったと伝えるが、創建に関与し、寺基を固めるのは博多綱首たちであった。

¹¹ 日本史大事典 下中弘 平凡社 1996 P2-623を参照。

栄西は中国浙江省の天童山景德禪寺千仏閣修造のため木材を寄進しているが、これは綱首の援助なしにはできないことである。

3.3 宗教都市の道へ

中世の博多は国際貿易都市になって以来、外国の文化、特に中国の文化が大量に輸入してきた。そのゆえ、博多は貿易交流都市だけではなく、多元的な文化都市となった。国際貿易都市博多の形成要因は何だろうか。九州大学日本史学者の川添氏の論点から見ると「聖福寺の創建に関して、次のようなことを想定している。博多綱首は宮崎宮、宗像神社などと帰属関係を結んでいたが、崇仏者で故国の禪宗を日本に移入することに熱心で、自分たちと関係深い栄西を結節点にして結集し、その財力で聖福寺の建立にかかわったのではないかと。博多綱首たちは故国の禪宗をさながらに博多聖福寺において見ることができた。それは彼らの貿易活動を有効に推し進める機能をあわせもったであろう。聖福寺は博多浜の広大な部分を占めており、鎌倉時代の国際貿易都市博多形成の原点となった。」¹²

中国に留学した経験を持つ栄西は博多に帰朝して聖福寺を創建後、約50年を経て、1241年（仁治2年）承天寺も創建された。開山は円爾であり、彼は日本と中国（南宋）の文化交流に大きな貢献を果たした。その時期の博多綱首の代表者は謝国明である。博多綱首たちは博多で租界のような時自治的な集住形態をとり、固い結びつきで貿易に従事していたようである。

承天寺は宋朝禪を直輸入した密教色のある兼修禪寺で、本寺である京都東福寺の末寺支配、同寺領経営、外来文物の受容などに重要な役割を果たした。円爾が学んでいた中国の径山万寿禪寺の復興に際し、円爾が博多綱首謝国明らにすすめて材千枚を送ったことはよく知られている。この相互に協力し合う密接な関係からみれば、「博多禪は聖福寺・承天寺を介し博多綱首を中心に担われ、綱首らの対外活動を通しての文化的・経済的な特徴が博多禪を方向づけた。

¹² 中世近世博多史論 川添昭二 海鳥社 2008 P61を参照。

博多禪は外来文物の中央への移入の一過性的な現象ではなく、博多において定着しており、しかも日宋一体的なものであった。博多は両寺建立を中核に、対外的には国際貿易都市として、内実は、いわば宗教都市として展開していた。」¹³ということがわかる。

4. 多元的な文化交流

4.1 日中国際文化交流

平安時代後半期から鎌倉時代にかけて博多は国際的な貿易都市として有名であり、日本と中国が船団を組んで盛んに往来し、経済貿易が活発になっていたのも、文化、宗教など国際交流も積極的に進んでいる。

当時の博多商人らは博多に中国文化を東漸して重要な貢献をした。最初、「大唐街」を根拠地にして、貿易品の調達、博多住民との物質交流に務めた。

博多綱首謝国明は、海上交通の要衝である宗像神社社領小呂島の地頭として、島を貿易拠点として、中国への玄関口である博多で店を構えた。京・鎌倉への中継貿易で利益を上げていたそうである。陶磁器や乾物などの食糧などあらゆるものを取り扱っていて、博多の交易、文化の向上、貧民救済などに大きな貢献をした。

博多住民との深い接触が、承天寺の建設につながってゆく。博多の町づくりに綱首謝国明が役立てようと考えた南宋の宗教文化は、思想的には南宋禪、南宋絵画。生活文化では絹織物業、まんじゅう、ソーメン、東洋医学など、多岐にわたる。このころの国際都市博多は、南宋の禪文化圏に内包され、その重要拠点だったのである。謝国明は物産の交易だけではなく禪宗の渡来にも貢献している。当時の仏教は、文明的な象徴でもあったから、博多及び日本への文化東漸に大きな役割を果たしたのである。

1242年夏、徑山の仏殿再建のため、謝国明は無準師範に材木千板を送り届け

¹³ 中世近世博多史論 川添昭二 海鳥社 2008 P62を参照。

た。普段は大量の材木を運送するのは困難だが、謝国明の力で径山に運ぶことができた。翌年、無準師範からお礼に、虎の図二本が贈られている。「禪に対する理解があったこととともに、絵画を愛するなど教養も高かったことがわかる。故国の宗教、つまり無準師範の禪を日本に伝えようという熱意が、このような助成行為となったのでたろう。謝国明の行為は営利面を捨象するものではないとしても、日本・南宋両国にわたる国際的勧進のうちといってもよい。」¹⁴

4.2 聖一国師と謝国明の信頼関係

1233年（天福元年）4月、聖一国師（円爾）は栄尊らと共に入宋のため、博多に赴いた。このきっかけで博多で40歳の謝国明¹⁵と会った。在博初期、謝国明は聖一国師に宿屋を提供する。聖一国師は中国に渡る前、二年間ぐらいそこにおいて、謝国明あるいは謝国明の友人から中国語を習ったと考えられる。そして、謝国明は彼の入宋留学費用も負担し、1241年に博多に帰着したばかりの聖一国師のため、承天寺を建立した。1242年夏には、径山の仏殿再建のため、聖一国師から提案し、謝国明は無準師範に材木千板を寄進した。謝国明のさまざまな助成行為により聖一国師が禪の発展への貢献に専念できることとなった。

1243年「正月、大宰府有智山衆徒、円爾の禅化を嫉み、承天寺を破却せんとす。朝廷、承天、崇福両寺を官刹とす。」¹⁶承天寺を建てた頃、教義の相違が原因で、円爾が禅宗の高僧になっていることに反発して、天台宗である大宰府の有智山の衆徒が円爾を襲撃するという、険悪な状況になった。その時、謝国明は円爾を櫛田の自宅に匿って、人身の安全を守ることができた。僧兵を抱える有智山に対抗できるのだから、謝国明の力と信頼が見てとれる。結局、朝廷は有智山衆徒の要望を退け、逆に承天寺と崇福寺を官寺に指定するのである。官寺になれば誰も手が出せないため、この事件は無事に終結したという。

1248年に承天寺が火災にあった時、円爾が西下して博多に至り、謝国明が喜

¹⁴ 東アジアの国際都市 博多 川添昭二 平凡社 1988 P24を参照。

¹⁵ 謝国明の年齢は建久2（1193）年、宋で生まれたと推定する。

¹⁶ 付録：聖一国師年表を参照。

び迎え、「一日の中に殿堂十八字を再建させた」と伝えられている。聖一国師に対しての友情と信頼心がはっきりと見える。円爾と謝国明、僧と商人の出会いは博多にとっても、日本にとっても、大事な交流であった。

4.3 神道と仏教の宗教融合

祇園の神である素戔鳴尊は、インドの釈迦の生誕地に因む祇園精舎の守護神であるゴツテンノウ（牛頭天王）ともされていた。博多の櫛田神社にも素戔鳴尊が奉納されている。牛頭天王の名前の由来は、新羅に牛頭山という山があり、熱病に効果のある柃檀（センダン）を産したところから、この山の名を冠した神と同一視された。それというのも、素戔鳴尊は、新羅の曾戸茂利（ソシモリ）という地に居たとする所伝も『日本書紀』に記されていて、「ソシモリ」は「ソシマリ」「ソモリ」ともいう韓国語で、牛頭または牛首を意味し、韓国には各地に牛頭山という名の山や牛頭の名の付や島がある由である。さらにインドの密教や陰陽道の信仰とも混じりあって、神仏習合の形で祇園信仰が広まった。つまり、祇園の神といえは日本固有の神道と、インドの仏教と、中国の道教等の習合によって生み出された、いわば、神仏の宗教融合で国際的な神さまである。祇園祭¹⁷の始まりは平安時代初期、都に疫病が流行して、多くの人々が死に絶え、大災害となった。この災厄の発生を人々は政治的に失脚して処刑された人の怨みによる祟りであろうと考え、はじめこの御霊をまつた。しかし怒りは治まらなかったため、より強い神仏が求められたのである。この怨霊（御霊）を退散せしめることができるのは、素戔鳴尊のような、偉大な神格の神に頼るほかないと、祇園社に祀られているこの神に祈ったのである。清和天皇自ら6月7日に全国の国数にあわせて66本の鉾をたてて祭りをしたのが全国に広がっていったという説もある。

神仏混淆という時代を背景に、博多に祇園社ができて以後、祇園祭として山笠が始まった、はじめのうちは京都スタイルだったと思われる。日宋貿易が活

¹⁷ 日本史大事典 下中 弘 平凡社 1996 P2-625 を参照。

発になって以来、禪を修習している聖一国師が施餓鬼棚水まき祈祷を行って以降、これが今、現代に見られる博多山笠になったと考える。

昔、祇園祭は五穀豊穡を願う農村の祭であった。その一方で、対照的に疫病退散を願う都市の祭でもあったと思う。日宋貿易の拠点として栄え都市化も進んだ博多において多くの人が集まるようになり人が集まれば夏には、疫病がはやることも珍しくなく、信仰や祈祷に頼っていた人々が神仏あるいは多元的な宗教融合している神様に、その疫病退散を願ったのであろう。

5. おわりに

770年前、博多津中に悪疫が流行したことがわかり、聖一国師の恩顧に報う博多っ子のゆかしい感謝の表現である博多祇園山笠祭になったことがわかった。しかも、その時には中世博多において日中国際交流、聖一国師と謝国明の交流、神仏の宗教交流など多元的な交流が非常に盛んであった。もし、聖一国師が入宋しなかったならば、謝国明が活躍できなかったならば、今日、770年の伝統を誇る国指定無形民俗文化財という成果にはならなかったかもしれない。

当時、博多に悪疫がはやっていた時期、聖一国師は博多住民のため、見事に疫病を退散させ、偉大な事蹟を成就したので、時勢が英雄を生んだと言える。しかし、博多祇園山笠祭はすべて聖一国師の功績だとは言えない。聖一国師を支えて重要な役割を果たしたのは謝国明だからである。現在、博多の歴史を回顧すれば、日中間の交流が頻繁だったこと、謝国明ら商人が地元の繁栄を支えたこと、外来の中国文化を輸入して東漸させたこと、神仏融合していたこと、全部の要素が伝統的な祭の起源に大切な関連性を持つ。博多祇園山笠の起源時期に関する考察は、この意味において、重要な意義を有していると考える。

参考文献

1. 博多祇園山笠史談 落石栄吉 博多祇園山笠振興会 1961
2. 博多承天寺史 広渡正利 文献出版 1977
3. 東アジアの国際都市 博多 川添昭二 平凡社 1988
4. 日本史大事典 下中 弘 平凡社 1996

5. 福岡県の歴史 川添昭二・武末純一 山川出版社 1997
6. 中世近世博多史論 川添昭二 海鳥社 2008
7. 謝国明と博多についての一考察 崔淑芬 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要 2009
8. 博多祇園山笠振興会の公式ホームページ
<http://www.hakatayamakasa.com/history.php>

付録 聖一国師年表

西暦	年次	事 蹟	参考事項
1202	建仁 2	10月5日駿河国に生る。	三月、源頼家建仁寺を創む(栄西開山)。
1206	建永元	駿河国久能山堯弁の室に入る。	
1215	建保 3		6月4日、栄西寂す。
1219	承久元	春、三井園城寺に祝髪す、1月20日 奈良戒壇院に受具す。	
1223	貞応元	神子栄尊らと上野長楽寺栄朝に参す。	
1224	元仁元	見西より三密の秘印をうく。	
1226	嘉禄 2	鎌倉寿福寺に遊学、退耕行勇に謁す。	
1233	天福元	4月、栄尊らと共に入宋のため博多に赴く。	*謝国明と会う。
1234	文暦元	高麗国王、円爾に法語を求む。	
1235	嘉禎 3	4月1日、栄尊と共に平戸を出帆、入宋の途につく。夏、径山無準に参す。	藤原道家東福寺を創む。
1237	嘉禎 3	10月、無準、法語を円爾に与う。	
1238	暦仁元	5月、無準自像に賛し、円爾に与う。6月、栄尊帰朝す。	
1240	仁治元		湛慧、崇福寺を栄尊肥前万寿寺を創む。
1241	仁治 2	正月23日、無準、行状記に奥書して円爾に与う。 2月1日、無準、伝法心印等円爾に附す。 4月20日、径山を辞す。無準揚岐の伝法衣等を授く。 5月1日、明州定海県より乗船、帰朝の途につく。 6月、途中風波の難に遭い、高麗国に避難す。 7月、博多に帰着。 8月、謝国明、円爾のために承天寺を創む。 この年、随乗房湛慧、太宰府崇福寺に円爾を請じ開堂す。栄尊の請により肥前水上万寿寺に開堂す。	*諸説：疫病除去のため施餓鬼棚に乗って祈禱水(甘露水)をまいたのが始まりという。

1242	仁治 3	夏、径山の仏殿再建のため、材木千板を寄進す。 9月、謝国明、承天寺を慶し、円爾を開祖とす。 この年、悟空敬念、承天寺において円爾より受具す。	
1243	寛元元	正月、大宰府有智山衆徒、円爾の禅化を嫉み、承天寺を破却せんとす。朝廷、承天、崇福両寺を官刹とす。 同月、湛慧上洛して円爾を藤原道家に紹介す。 2月、上洛して月輪殿において道家に謁す。 この年、無準、寄進の材木に対する謝書を送り来る。	
1244	寛元 2	5月5日、道家に禅要を説く。 8月、上野長楽寺に栄朝を省す。 9月、久能山に琥珀羯鼓を奉納す。	この年、建仁寺焼く。
1247	宝治元		9月26日、長楽寺栄朝寂。
1248	宝治 2	この年、承天寺が火災にかかる。西下して博多に至り、承天寺復旧をはかる。 謝国明、喜び迎え、一日の中に殿堂十八宇を創む。	
1249	建長元	正月21日、北条時頼、建長寺造営のため、円爾を拝請す。 7月、承天寺再建成る。	3月18日、径山無準師範寂。
1280	弘安 3	2月上旬、病む、毎日行道を怠らず。 6月1日、東福、承天、崇福、水上万寿寺の規範八ヶ条を掎制し、とくに東福住持は円爾一派制を厳守せしむ。 10月17日、卯刻、遺傷して示寂す。	
1311	応長元	＊花園天皇から聖一国師の勅諡号を受けた。 年表内容は、「博多承天寺史」により、＊のマークは、「博多承天寺史」には収録されない事項である。	

年表内容は、「博多承天寺史」により、＊のマークは、「博多承天寺史」には収録されない事項である。